

## サッカー〃日中戦〃と日中関係

田宮昌子

昨年夏、中国の反日感情が話題となったサッカーアジア杯。決勝はその点でもクライマックスとなった。私は偶然、決勝前後の十日間を北京に滞在した。当然かもしれないが、日中双方での報道や人々の受け取り方には大きな違いがあった。日本では反日感情に焦点を絞った報道がなされ、世論調査ではこれを機に日本人の対中観が悪化したという。今回の報道だけを見比べても、双方の報道には国籍があつて、それぞれの国情と国民感情を反映しているようだ。帰国後は少なからぬ人々から「大丈夫だった？」と見舞いの言葉を掛けられた。北京は確かにいつもの北京と違つてはいたが、やはり実際の「現場」というものは平凡

でどこか間延びしたものであり、映像の中の北京のように刺激的ではなかった。以下、北京での私の実感と日中関係の好転を願つての考えを記してみたい。

北京に出かけたのはちょうど八月の初めであつたが、空港到着時から北京市民の日中決勝戦に対する関心の高さを感じた。日本人とのやりとりにも普段とは違つた特別な感情が沸くようであつた。空港から乗つたタクシーの運転手に「北京有什麼新聞嗎？」（北京での最近のニュースは）と尋ねると、すぐ日本との決勝の話が出た。日付もきつちり出てきて関心が強いのが分かる。私は普段スポーツの話題には疎いが、出かける前から重慶でのブライニングが話題となつ

ており、「万一決勝が日中戦になったら大変では」と報道されていたので、「えらいことになつたな」と思う。

外国で短期滞在者が庶民層と触れる貴重な機会となるのが、タクシー運転手とのやりとりである。北京の運転手は大抵話好きで、彼らのおしゃべりは北京滞在中の楽しみの一つだ。乗り込んでしばらく経つと「どこの人？」と質問されるのはいつも通りだが、今回は日本人と答えると「日本人!？」と素つ頓狂な声を上げる人も。二〇年以上日中間を行き来してきて初めてのことである。「怎麼?」（それが何か?）と言うと「没怎麼」（いや別に）と返してきた。そこで、アジア杯での中国サポーターの態度について報道があるが、と水を向けると、「日本人受の部分球迷的不友好待遇」（一部のファンが日本人に非友好的態度を取つた）という表現をして、「それはデマ。

日中関係を悪くしたい人間がデマを飛ばしているんだ」と言う。一方、日本人と分かかって「日本女性はとつてもいい！ 慎ましくて品がある」とか褒め始めた運転手に「北京有什麼新聞嗎？」と同じ質問をしてみると「沒什麼。挺平靜的」（特に何も。とつても平穩）と言う。この「平静」という言葉に妙に意識しているのを感じる。同僚の間ではかなり話題になっているに違いないし、日本はさしずめプロレスの悪役レスラーの役回りなんだろうなと推察してしまう。

タクシーでスーパーで、とにかく日本人と分かると決勝の話になった。北京で「日中戦」が行なわれるということを意識していない北京市民はいないようだった。普段スポーツ観戦には縁のない私もその空気に感染してそわそわして来る。当日は宿泊先近くのピアガーデンが即席スポーツバーになって百人近くがビールを飲みな

がら観戦していた。中国観客に混じって雰囲気味わうに如くはなしと、真ん中に陣取り観戦。熱心な応援であったが攻撃的とか暴力的興奮状態というものではなかった。日本がゴールしそうになる度に悲鳴が上がってはいたが、「小日本人……」という声は二、三度聞こえたが、「中国がんばれ！」程度の掛け声にも応じる人は少数で、三点目のゴールが決まるとバタバタと席を立っていく人も多かった。もちろん六万人という会場の大観衆とは訳が違うし、目の前に日の丸も君が代もないので「愛国心」が刺激されることもないのだろうが、この素っ気なさも北京の当夜の現実である。

しかし、翌日テレビ報道をチェックしてみると、BBCニュースは何とか緊迫感を演出しようとしていた。画面には照れ笑いをしている顔も映っていたが、リポーターのコメントは深刻そ



う。一方、中国局はというと、中央電視台の特集「工体無悔」（工人体育場に悔いなし）は、前夜の北京市民の期待と関心を市内各所から捉え、場内外が心を一つにして、悲願の達成を思う感動が主体で、サポーターの騒ぎには言及せずじまい。一方、日本のゴールが反則と指摘されていて、問題シーンが繰り返し放映される。そして、中国の敗因を日本の反則を審判が見落とした、それに対する中国側の抗議が不十分だったことに求めている。この点は、その他の新聞雑誌でも媒体の性格の違いに関わらず一致していた。この特集でのコメントは「中国隊太老実、太有紳士風度了」（中国チームはおとなし過ぎ、紳士的過ぎた）。確か日本でも五輪での微妙な負け方の時に似たような台詞を聞いた気がする。どこでも自画像というものは、善良な弱者であるようだ。

「反則問題は、スポーツ紙では「日

本が優勝を盗んだ」などと刺激的見出しで書き立てられていた。地下鉄ではそういう記事を熱心に読み、カノジョに指さして読ませる若者を見掛けた。インターネットはより無責任で恣意的な書きっぷり。体格は劣っているけど金に飽かせて強化しているお金持ち。審判も買収されてるかも？ いざとなるとずるいし……。

翌日は、友人一家を訪ねた。お父さんも息子も日本留学経験がある。すぐに「昨日の試合は見た？」と息子。彼は友人たちとレストランで観戦したという。父親も中国チームの戦いぶりにはよかったし、二点目ゴールは「手球是肯定的」（反則に間違いはない）と言う。問題の映像はあちこちで目にしたが、日本人の目にははつきりと反則とは見えないものであった。映像は客観的なようだが、結局はそれを見る人間が主観から自由に見ることは不可能なようだ。

ともかく、アジア杯決勝は北京市民にとって後味の悪い無念な試合となったのである。タクシーでのやり取りは気まずいものになった。日本人に感想を聞いてみたいらしいが、言葉を選んでしまうようであまり行かない。結局、試合後は運転手とこの話題でまともに会話をすることは出来なかった。

しかし三日もすると、市民の関心は急速にアテネ五輪開催に移っていき、アジア杯は終わったスポーツイベントに過ぎなくなっていた。人々は次の開催地として誇りと緊張感と一抹の不安を感じているようだった。もちろん日本で中国の五輪開催能力や歴史教育が議論されていようとはつゆ知らず……。

帰国してから見た映像の中の北京は敵意に満ちた刺激的なものだった。自分たちが国民として別の国民からこんな風に扱われるのだと思えば、ショックを受け反感

を感じてもらう。双方にしているのは、当たり前の人情を持ったごく普通の人間であるのに、報道が作り上げるバーチャル空間の疑似体験から双方が不信や恐怖を募らせている現在の事態には哀しみを感ずる。

日中間係は小泉首相の靖国参拜問題を巡って国政レベルで不正常的な状態が続き、双方の利害を調整すべき政治機能が休眠状態で、それが日中間に生起する様々な事柄をこじれ易くしてしまっている。それに連れて双方のナショナリズムも格好の敵役を見つけてしまったようだ。日ごろ大学で接する学生たちの対中観も悪化の一途を辿っている。

日本の報道の状況は周知の通りだが、中国でも自由化に伴って民間メディアが登場、商品としての報道が盛んになっている。このことが近年の反日感情の噴出に大いに関係しているだろう。インター

ネットサイトだけでなく、街頭で売られる新聞雑誌も性でも醜聞でも驚くほど「自由」である。受け手を引きつけるために刺激的に編集された映像や扇情的な記事……。現在、世界の情報は瞬時に流れ、私たちは世界の情勢に通じているように錯覚してしまいが、実際に私たちが日常で触れている報道には国境や国籍が濃厚にある。情報化社会は、一つ間違えば国際理解を促進するどころか否定的イメージの強化の悪循環を招くこともある。

では日中間はどこをどう間違ってしまったのか。日中間の齟齬の根底に歴史認識問題があるのは明らかである。アジア杯の後、日本では中国側の問題への批判が多くあった。個々の指摘自体は鋭く射的を射ていたりしたが、私はこれらの指摘に辛くなってしまう。素朴な感じ方だが、中国はあれだけの被害を受けながら復讐も

占領統治も賠償請求も出来なかった。さらに今一方的に日本を許すために苦しまなければならぬとしたら、歴史はあまりに不公平なものではないかと。日本の若者たちは日本が中国に何をしたのか驚くほど無知である。政府要人の言動にも被害国民の感情を真に慮る誠意が感じられない。歴史問題に関してはまず加害者側である日本に多くが求められて当然なのではないか。少なくとも相互理解と和解の促進のために「双方になすべきことがある」という認識が日本に必要と思う。

(宮崎公立大学助教授)